被養育経験と育児不安が養育態度に及ぼす影響

— 幼児をもつ父親と母親を対象として —

松本添実¹・赤澤淳子²

(福山大学大学院人間科学研究科¹・福山大学²)

キーワード：養育態度，育児不安，夫婦

Effects of experiences being parented and childcare anxiety on parenting attitudes

Soemi MATSUMOTO¹, Junko AKAZAWA²

(Graduate School of Human Sciences, Fukuyama Univ.¹, Fukuyama University²)

Key Words: parenting attitudes, childcare anxiety, married couples

目 的

養育態度には親のこれまでの経験や現在の精神的な状態が影響を与えていると考えられる。本研究では、両親の被養育経験と育児不安に焦点を当て、それが現在の子どもへの養育態度にどのような影響をもたらしているのか検討することを目的とした。

方 法

調査対象者 A 県の幼稚園・保育園に子どもを通わせている父親 138 名 (平均=37.6 歳, $SD=5.48$), 母親 165 名 (平均=35.5 歳 $SD=4.94$), 計 303 名であった。

調査日時 2017 年 8 月～9 月に実施した。

調査手続き 父親・母親用の質問紙を、幼稚園・保育園の先生方にご協力いただき配布し、各家庭で回答してもらった。

質問紙の構成 1.養育態度：中道・中澤 (2003) の親の養育態度尺度、渡辺・広利・松本 (1993) の MS 式養育態度診断尺度、赤澤・竹内 (2015) のデータ DV 尺度を参考に、15 項目を作成し、4 件法で尋ねた。2.被養育経験：養育態度で使った 15 項目の質問文を回答しやすいように書き直し、4 件法で尋ねた。3.育児不安：住田・中田 (1999) の育児不安尺度を参考に 12 項目を作成し、3 件法で尋ねた。4.回答者の属性：年齢、同居の有無、子どもの人数、子どもの年齢、職業、就労時間、育児サポート。

分析方法 因子分析と分散分析、重回帰分析を行うため、統計解析ソフト IBM SPSS Statistics 21 を使用した。

倫理的配慮 調査の目的、匿名性が保証されていること、回答は任意であり協力しないことによる不利益が一切ないことを表紙と調査票に添付した依頼書に明記した。

結 果

被養育経験と養育態度の関連 被養育経験が子どもへの養育態度に及ぼす影響について検討するために、自身が幼少期に親から受けた被養育経験「応答性 1」、「拒否的態度 1」、「暴力 1」、「統制 1」を独立変数、自身の子どもへの養育態度の「応答性 2」、「拒否的態度 2」、「暴力 2」、「統制 2」をそれぞれ従属変数として、父親・母親それぞれ強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、父親において「応答性 1」は「応答性 2」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.302, p<.001$)。また、「拒否的態度 1」は「拒否的態度 2」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.182, p<.05$)。さらに、「暴力 1」は「暴力 2」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.380, p<.001$)。「統制 1」は「応答性 2」と「統制 2」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.183, p<.05$; $\beta=.283, p<.01$)。母親においては、「応答性 1」は「応答性 2」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.292, p<.001$)。また、「拒否的態度 1」は「拒否的態度 2」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.169, p<.05$)。さらに、「暴力 1」は「暴力 2」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.307, p<.001$)。「統制 1」は「暴力 2」へ負の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=-.156, p<.05$)。

育児不安と養育態度の関連 育児不安が子どもへの養育態度に及ぼす影響について検討するために、育児不安を独立変数、自身の子どもへの養育態度の「応答性」、「拒否的態度」、「暴力」、「統制」をそれぞれ従属変数として、父親・母親それぞれ強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、父親において「育児能力に対する不安」は「拒否的態度」と「暴力」へ正の有意な影響を及ぼしており ($\beta=.399, p<.001$; $\beta=.218, p<.05$)、「応答性」と「統制」へ負の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=-.187, p<.05$; $\beta=-.222, p<.01$)。また、「育児に対する肯定的感情」は「応答性」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.258, p<.01$)。母親においては、「育児への負担感・束縛感による不安」は「拒否的態度」と「暴力」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.289, p<.01$; $\beta=.268, p<.001$)。また、「育児能力に対する不安」は「拒否的態度」へ正の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=.244, p<.01$)。さらに、「育児に対する肯定的感情」は「応答性」へ正の有意な影響を及ぼしており ($\beta=.319, p<.001$)、「暴力」へ負の有意な影響を及ぼしていた ($\beta=-.205, p<.01$)。

考 察

父親・母親ともに、自身の被養育経験が子どもへの養育態度に同様の形で受け継がれているということが明らかとなった。これまで母親における世代間伝達は明らかにされてきたが (e.g., 金政, 2007; 数井他, 2000), 本研究より世代間伝達が父子関係においてもみられるということが示唆された。

また、育児不安と養育態度との関連について検討した結果、母親は育児への負担感や束縛感が高いほど、子どもに対して拒否的かつ暴力的な養育態度をとることが明らかとなった。岡本ら (2002) によると、母親が行う育児は父親とは異なり、「食事介助」や「排泄介助」などのような専門的な知識や技術を必要とする育児行動の割合が高く、育児の内容に偏りがみられることが明らかとなっている。このような育児における不均衡が、母親のストレスを高め養育態度に悪影響を及ぼすものと推測される。一方、父親においては、育児への負担感よりも育児能力に対する不安が高いほど、子どもに対して拒否的な態度や暴力的な態度をとることが分かった。父親は労働時間が長く育児に参加できないことや、親になるまでに子どもと関わる機会が女性より少なく子どもと関わることに慣れていないことなどが原因と考えられる。

今後は夫婦関係が養育態度に及ぼす影響について、ペアデータを用い検討したい。

引用文献

- 金政 祐司 (2007). 青年・成人期の愛着スタイルの世代間伝達—愛着は繰り返されるのか— 心理学研究, 78 (4), 398-406.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究, 48, 323-332. 他